

江戸時代の小袖雛形

『当世
模様 雛形千歳草』

助教授（日本服装史担当）佐藤 泰子

江戸時代の市民文化の成長に伴う小袖の目覚ましい発達、元来は呉服商が専有した注文図案帳を市販の小袖雛形本として続刊させた。そのほとんどは、墨一色の木版刷で、書名・序文・1頁1図の小袖図・刊記から成り、各小袖図には通し番号と余白に模様名・地色・地質・加工法を適宜傍注する。したがって、それは小袖染織の推移を如実に伝える絶好の資料といえるのである。特に、各々に明記された刊年は、その書が再版でない限り、資料的価値を一層高いものにする。この分野の代表的な調査研究には上野佐江子氏の綿密な報告（「天理大学学報」ほか）があり、氏はこれを集大成して、31種の復刻本と当時判明し得たすべての木版本158種の解題から成る『小袖模様雛形本集成』¹⁾を刊行された。よって、ここに取り上げる『当世¹⁾模様²⁾雛形千歳草』(753.8-H)は、既に解題があるものの、復刻本には所収されていないので敢えて原本を繙くことにした。但し、表紙の題簽が当初の様相を留めないため、書名は氏の報告に従った。

さて、この書は、刊記に「洛陽画師 三文字屋弥四郎 宝暦四甲戌歳（1754）正月 大阪（略）柏原屋清右エ門 京（略）萬屋作右エ門 同（略）文台屋多兵衛」とみるように、京都の画師による江戸中期の三書肆合同出版の書である。210余年を経た今日、先述のごとく繙色の表紙は書名を記したはずの題簽を失い、各紙面にも変色やヨゴレが目立ち、さらに柱刻の「ちとせ草序・上、中、下」の区分が、本来は3分冊であったことを意味するならば合冊の現状は改装本ということになるなど、諸々の難点は実用に供してきた消耗書ゆえの宿命といわざるを得ない。むしろ、雛形本の完本は希有であるといわれるから、落丁のないこの書は、

完本に近いものとみるべきであろう。そこで、慣例に習い書名の由来を記す序文と、書名に因み祝儀の序幕を象徴して翁の面や神楽鈴を取り合わせた三番叟の挿絵に次ぐ95図の小袖図に、染織上の特色を求めると、ちくさ（14図）・黒（9図）・桔梗・鶯色（各6図）などの地色はおよそ30色を数え、ぬい・かのご・金銀でい・さいしきえ・白上げ・友禅・ぼかし・染分など各図各様の技法による小柄を散らした総模様を主に腰高模様も散見される。これらは、当代の傾向の典型であるが、さらに、それに終始しない二つの視点について触れてみたい。

その一つは、光琳模様3図（44・63・79番）の掲載である。この、光琳模様は、前代、正徳一享保（1711-36）頃の好尚であり、『光琳ひいなかた』（¹⁷¹⁵正徳5）『光琳¹⁷¹⁵わかみとり』（¹⁷²⁷享保12）などと、書名にその名を冠した雛形本も刊行された。母方の叔父に光悦を得て、東福門院等を顧客とした京呉服商雁金屋という上層町衆の家に生育した尾形光琳は、卒年を享保元年（1716）とするので、在世中の

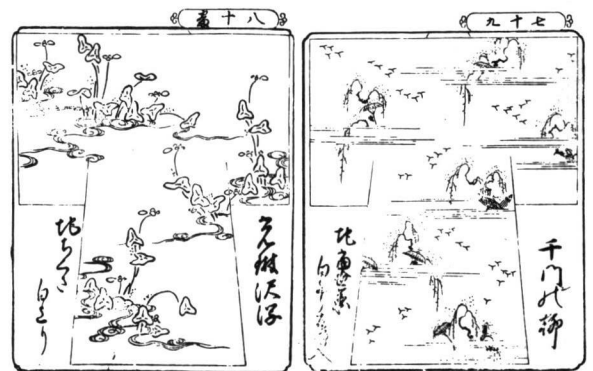


図1. 右 小柄な総模様 千門(せんもん)は内裏の外郭門のこと

左 光琳模様

刊行である前者の画師は、序文に「珍らかなるもやうを光林の筆にそめ」と叙して優美を極める彼の画風を収めた『¹⁷¹⁵當美女のひいなかた』(正徳5)などとともに、光琳自身との推測もなされる。後者は、刊年より、当然自筆であり得ないが、全図にこの流麗な画風を描きながら「光林絵師 長谷川清久」成筆とした『¹⁷²⁷雛形糸簿』(享保12)の刊行例もあわせて、なお盛況のようすがうかがわれる。それから27年後の、この書の光琳模様は、その余韻とみるべきものであろう。

他の一つは、裏模様の表裏の図(59・60番)と島原褌(61番)・江戸褌(62番)の掲載である。まず、裏模様について、その語を明記した雛形本はこれを初見とし、少数の後続書を見る。また、流行の時期を記述に求めると、宝暦明和(『守貞漫稿』)、其頃(明和安永の頃『賤のをだ巻』)、安永天明の頃(『復古染』)、近來はやる(『飛鳥川』¹⁸¹⁰文化7)とある。次いで褌模様の掲載例も、『雛形袖の山』(¹⁷⁵⁷正徳7)に「褌下」(3図)「江戸褌」(5図)、『新雛形曙桜』(¹⁷⁸¹安永10)に「嶋原つま」(2図)と江戸褌の図(11図)が当書に続き、『雛形千歳袖』(¹⁸⁰⁰寛政12)に至っては、92図中63図がそれと見なされる。したがって、この書における裏模様・褌模様は、流行の初期を記すものといえよう。これに関して、『丹前ひいながた』(¹⁷⁰⁴宝永元)にも裏模様風の袖図と「江戸つま」と傍注した1図を見る。しかし、

当書に50余年も先行するそれは、元禄期(1686—1704)の気風の転換の結果とみるべきものであり、来たるべき小袖染織に対する一つの示唆であったとしても流行を先導するものではない。なお、裏模様を置く位置について、雛形本の描法は袖裏を明らかにしないが、管見5領の実物資料(三井家旧蔵 文化学園服飾博物館蔵)には、いずれの袖口裏にも及び、さらに白地の背裏に白糸で刺繍したのもも遺存する。上述の裏模様・褌模様に関する詳細は既報を参照されたい。³⁾

この書が刊行されて間もない明和3年(1766)頃には、京都は「今は花の田舎たり」と叙せられ(『見た京物語』)、やがて、渋味の勝った江戸好みの時代、小袖染織は褌模様が定型化し、また雛形本に登載されない縞や緋や小紋へと拡散する。その移行期を彩った当書の京画師、三文字屋弥四郎の麗筆は、「前代を継承するもの」と「後世の流行の先駆をなすもの」の両面を備えた、江戸期の小袖染織史の一面を語る好資料といえるのである。

注1) 学習研究社 1974 (753.8-K)

2) 前掲1)所収 小袖模様雛形本集成(4) 解題 p.23-24

3) 佐藤泰子 近世模様小袖考——模様配置に関する考察——文化女子大学研究紀要第11集 1980 p.169—175

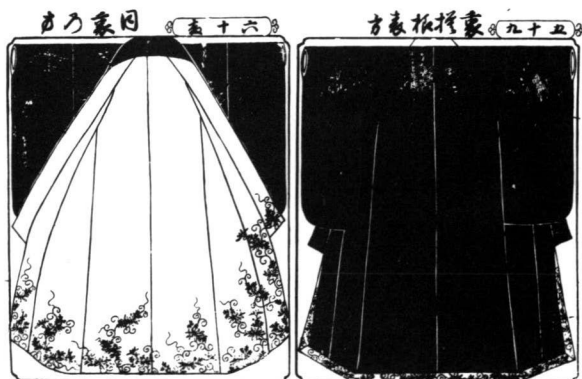


図2.裏模様の表裏

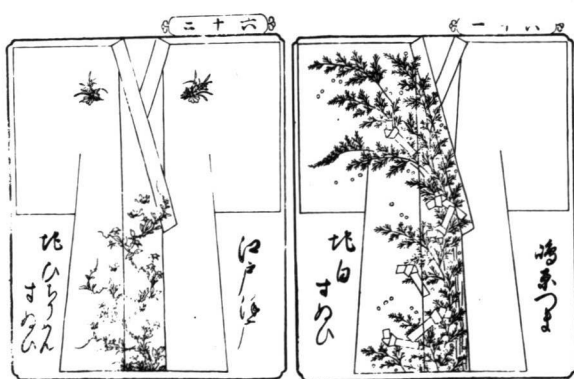


図3.右 島原褌 左 江戸褌 すぬひ(素縫)は総刺繍のこと